梅翁發句集

1959

特
へ5
1959

序

當流乃始祖梅花翁宗周誹諧の一ものゝ
あるを案ずるに其香かぐはしく湯春の名を
見せし人實に文延寶の比也翁はじめ西山
豊一と云ふ時乃肥後侯の藩中八代の加藤
正方の屬し文雅をこのみ和歌をもてなす
かゝるに寶永九年大守さゝるゝの有るに依て
武州を遁れ出雲水乃郡方小路に居住を

五月の[illegible]ふかくもしづと半ば伏見あ
寓居せしかども湖東乃縣より遥て立やせ
をとかれ[illegible]ふかきよりみ君をうかがとに
いはまくまき地を望めよの命とうるおひ
宮ふかせう極つり山あり河を有
拙翁ゝ塔又東風吹誘てをくゝ浪速
江の一のまあふ杖を曳しる天満宮霊社宿
縁ゝありけむ正保乃比発蔦山中ふ

漂ひる住所を得て宮ふきらね歌乃
事をこのつうるいよ　神古路ふ叫しなる
ふあ南枝ふ雲ゝ祠とゝ[illegible]き北窓ふ雪の
力を陰ふく氣雲酒ふ[illegible]人形く音妻
路まくとゝ事ゝ形もなりあき
さりゝ武陽ふゝりて八紘乃諸林を
[illegible]きて世俗の眠ゝを覺させ[illegible]路ふ登ゝ
ふい同總本まを建て末流ゝ商量式

とゝめまゝ手ゝ益盛なるまゝに哀情
明瞭乃秋風多風雅を亂まゝ乃多
大櫻の喰ひの中を特揚梅に白ゝを
用て世と連歌ゝ絵ゝ貞享元禄に間み
一変せり侘に諸書ゝ我祖翁の名を
筆自式載さゝゝ稀也けまゝ流白ハ
徒活潑ゝいひ流ゝ自の稿ゝけまゝ
果ゝ河邊の新さゝゝ野をとゝめ中

世未とゝ世自ひをとゝと業ゝ
日乃まゝ式絵ゝハ商家ゝ探ゝ雪中ま
中ゝひゝ必ゝ断今三百三才余章式
得ゝ中ゝ社ゝ社ゝ絵ゝ萬様の一系
形ゝ色けまゝ香ゝ味ゝ昔風俗を
いゝ世ゝ不ゝ為ゝ遊ゝ中ゝ本意ゝ
梅ゝ式ゝ加ゝ中ゝ鳥の跡ゝ水ゝ
少ゝめひと糸ゝ絵ゝ冊ゝ形を

牧童もなる事し時を待月紙まもる事
満花乃さかりを待へきと志の新しく
侍るなり

江戸誹諧林七世
一陽井素外述

安永十年辛丑春

梅翁宗因發句集

春之部

歳旦

新春乃声聞ハやるき云紫水
相夕法人を語りしらふ叶書
おもてろや浜辺初春乃色の書
の書く海く於て主也る年始の祝

歳徳や　寅年　神代　千代　五年　六
なつかしき　津国　住吉　丑　七
古歌　一日　世　五　月　春　かく　解
稀　彩　月　いつく　老　年　丑　書
多　し　の　沢　か　多　い　翁　こ　な
きみ　ふ　寅　年　き　ふ　寅　き　つ　乃　雪　宗春
書初　や　行　年　七　十　摂　別　の　任
巻　な　の　ハ　ま　を　く　か　つ　て　ん　か　く　む

連歌

七十　ハ式　何かとの　年　毛式　丑　丑　丑
家ふ　つ　と　と　ち　み　綿　や　き　う　始
おう　む　つ　る　箱　後　い　紀　乃　松　帰
主　や　と　し　と　ん　孔　年　当　ら　百　年　も
主　や　先　イ　ニ　と　経　一　る　岩　城　へ　戸　移　る
初　主　や　先　イ　ニ　貴　方　ふ　向　あ　岩　城　や　戸
子　日
拝　む　く　や　ひ　ね　と　の　ち　る　姫　小　松

梅

浪速津ふけく夜の面影梅の花　花乃会イニ

星とゝ宮ゝをいたゝみと字女性

梅さくやあはふのうゝ乃新築祝

いろはうり初るとは告うるふ

少人は白ふ梅ゝ自分此こゝもと

江戸祇諧俳林あて

はきはさくふ読株の木ゝ乃梅花

論語

貧而無諂富而無驕

主君の邦乃兎倉ゝの示あて

梅のゝ乳少ゝくおこゝ恩小文舟

花　櫻

ゝつ前ゝ急ふふふ見ハゝゝ

江戸と狂鑑ゝも也前ゝ搭

武蔵中ゝ法ゝ寺ゝ桜石酒

ゝゝ前ふつゝゆきゝ去祢ゝ夕嵐

花や見春宵一刻値千金

海棠一株一人千枝と存ず

なの打ちうと志うるに一枝ものの庭

墨染もよしや梅ふ花乃袖

浄瑠璃心の語りもしのみ笠の女

かつらむとともや撫ふ春ふ花の宿

ちまたにしよりかき花をしを乳の縁

笠ふ人法名をいふ戸葬の袖

古き歌日ふ見しふ乃ふ思ひさう

ふ乃ふ思ひいふ佐夜の中山笠乃雪

河上や京都乃楊柳肥前ぬ笠

中くもかあるを旅をふ乃中ふ

ふ乃坂乃せきふても行笠見ぬ

奥列へ半ふ乃ふ

葬ハ谷のふ花ふ谷ふ乃ふ吉表ハ

世ぬ中のふ表ハ幡ぬ笠ふ風

師梅のかくとうけて梅翁と
名のりて若年より人東乃吉ふ
翁のふをうけて下畧
ものの形ち正服芝乃江戸
公命ありて武ふ蔵ゆ彼西上人の
歌をいふ
なつのむとて花ゆいて頭乃骨
金鈴まうて

新古今
なつのむとて花ゆいて頭乃骨
もるとこのき社恋しうにれ四行

花はちりまはかりとなん外
讃品興昌寺宗鑑法師之旧跡
一夜庵再興勧進
花ゆいて花はいけまて一夜庵
追善
ゆとりとむ世乃本願此花の友
花の時は腕ゆ生涯絶なんと
是ハ侠者ふかとるの作也 松尾葉ゆるべき
より怪をきこうて

[illegible]

法華妙満寺ふ妙至ニ[illegible]

更ニ又法性寺殿[illegible]

伊勢ニて

唐錦堂乃床ノ[illegible]也伊勢[illegible]

小町像賛

おことはの風姿乱乃姿[illegible]

当世の風俗年ニ見ぬ[illegible]

かたるにしく[illegible]

[illegible]

[illegible]

春雨の[illegible]

[illegible]

平ふ[illegible]

初夢[illegible]

[illegible]

[illegible]

鎌倉宗盛[illegible]

[illegible]

胡蝶

世の中や[illegible]

かなしさハ蝶と花乃昔をしのひけむ

混雑

飛入や波海底乃きらし様式ニ如貞ヵ句とも有
池の中にことしを急く柳かな
鷺に入まハ漣へ向かふ雲雀かな
うかれ出て九ツにもなる夢みたる
なまし一種く野辺の宿かせ

新古今
上手も泪也行る夜寒をはなつを山
尾上の鐘乃ちはの月

長の月
まかいかく

小泊湖や眼鏡も金沢乃あらち　夕くれ
なのまれや一本咲し松の花
京都おて江雲日行きて薪見物の帰保昌をまへ出る
引かけ九郎や丘荷薪乃能

涅槃像

待かよふ手にも物言ふかれ佛
歎の道になきもさし丹ぬ
松千本蛸木のほうりしきあり　一那

新古今
ほとゝぎすそのかみ山乃旅枕
ほのかたらひし空そ忘れぬ　式子内親王

古今
暁の鴫乃羽かき百はかき
君か来ぬ夜ハ我そ数かく　読人しらす

夏之部

杜鵑

世もかくしも中ハ古し本やきにし
首明乃池乃残るかとゝまを
杜宇みのかへるみ待もこの声
子規よりて淀乃あたり
去のひきもやまるいこ郭公
ほとゝぎす来ぬ夜将かくかしらぬ

朗詠
人無更少時

茉莉庵に心しきけかと紀を
やゝとおきまの声てよるいの発句
法雨ありけるに
かくきゝいふ鬼神も惜まけ
谷水の岩の奥に
蜀魂にも峰乃落月かし
人よりも六月かくきゝ
ほとゝぎす我十一なとふ

後月路てて

かくきくに名のるや本多乃内侍の

新樹　木草の茂

おのしこめてかるべき芝山茶葉哉

芭蕉　暖て茂るや十間廊

主けアラ神々草津の焼や隠乃情

使ふ一時軒ち仮住菴の初冬

連歌

大和物語

業平朝臣三河国に

何ともしらぬ人に別れて

何ゝ路ぞ乃国八百屋哉

何ゝ路ぞ乃国八百屋哉

主ふ云ゝ物語せ

ぬきんでる母屋乃茂ゆる

江戸ゆてし四なよ麦

使ひ乃ゆ杉とい物へ八夏来る

夏日　経廻

こゝ乃ゆ彼ゆ子家ゆ明石潟

東をめぐりて伊勢に帰るとて

夏山や武蔵野に出て見れば
なつ(俳諧)やまの(夏)ぬ(野)ぬ(出)

木曽路
夏やまの(夏山の)ぬ(野)ぬ(出)ぬ(野)

螢
夏山をぬけゆくほたるかな

青梅の中
小倉山の紅葉の事をこいとかめんとしふ

昔火に百ちの河原となりぬ河
ほたるとなる事と呼ふ豊臣秀吉こゝろ
宮ふ一夜江戸(江戸を定めたもうたりしもいまだ)
江風さまめる火蛍かな

世の有さま所をありける
ふる風ふ藤原定めぬ昔この所
人麿の御影の御新か

唐筆叶さ紀の〳〵と宮叶昔とい

連歌

扇　園扇

手もとに流の跡をむこのふきゐ

扇ヶ谷　京家あそし

谷〳〵や世間（庚イニ）前（中ノ間）もち扇

ひのふけ〳〵いつく迄も地なら雲扇

納涼

江戸（アヅマ　あ代のタイニ）庶（ヒ）代の下納涼

摂津

津の国の乃こやかた人とゐ山きふ

江戸ゐ山せたちけむせのやつきゐ武蔵

津の国乃こやかた涼しむ人丹

兵庫丹あそし

かけ松や和田いおかきふ夕（ゆふ　ゆ　ゆ　ゆ）納涼

藻倉　ゐ

山乃内や高上杉の下納涼

金岡筆　捨松

ゐ〳〵（風イニ）ゐ松や杉ゐ見いと筆捨松

田子ゐ〳〵

やう原ー富士ハ殘り波の雪イ
雲津ケ原
かけ[illegible]し[illegible]原さ[illegible]ぞ路[illegible]

公太
[illegible]殘園梅イニ[illegible]
[illegible]は[illegible]人[illegible]
一日[illegible]為[illegible]殘[illegible]

上野
[illegible]民[illegible]
八[illegible]
[illegible]ふ[illegible]

清水
[illegible]
手拭乃雫[illegible]

混雑

はるしこ千ゑ百ゑきくにしらしを不盡乃雪
もちふき中ふ沖ふ沖種ゑ水ゑ
筆ゑ二すの山ふまい和尋この那

堰所肥前う望ゆて是ゑの沉乃肥前節ゑ
若行乃未一勝くうき世ふし
やゆ三はふ夕アゑかね沉釣鐘
尚別、八相乃かね沉志ふくイニ

於ゑなき後ゑ後の市と世ゑ中ゑ
いさまくゑ乃ふ乃ゑ乃ゑ人ゑ

鮫橋やなゑまゑとゆ乃ゑ乃ゑ乃ゑ
何代ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ乃ゑ
安部市のイニやいはまる人を豆紙ゑ
はけらふ大鋸屑ふ夕アこの
なんゑゑ揚梅の接むうーロ

本所東安楽まのいるふ
新地ふゑかくゑるゑ梅乃接
はまれくゑ光ゑくゑ沉ゑくゑ云

[illegible]くもや帰雁紙幟
五月雨ハ只ハしらさみ秋信を
江山や沼津の屋風夕の月
命なりけりふる湯山香薷散
夕の秋ちしほの虚貝殻
こゝ中ちしし詣
みちしきぶふ音毒みも十間よ
人並の海ともちをそ中屋板河

秋くゝ部
立秋
きりぶふ中をしら菖乃紫法
紫嬰（板冊ニ）ゝ夏ハ夕暮ハ秋の秋

一葉
秋や来るのふくゝ老れなる一葉舟（三葉イニ）
頼船と足中ゝ立と葉ちふね

七夕

天の川はこの羽根も星の書
月の青きうちを星乃おもかな

躍

かけろくもこのしらべや宮の踊り
とりつやや西町五つかけむふ
躍るかなるる秋乃なりしの音

秋扇

秋書もつるるはり法扇の那
西本願寺ふて
西の風イニ
西風や何うら自力乃扇法き

萩

かるる籠はこのまとは萩のおもかな

万葉
賤が秋を秋とふ山れ我ぞし
居ながら秋を秋とおもふ人ぞ知る
秋とはいふべし

人丸

ちゝの秋昌次が射しく
皆人は萩を秋といふ長いもを
江戸京師にてはなれが
江戸小旅くれ露も霧萩もを紀
追善　七州萩が江戸一親の追善イニ
少しなれ人見ぬ花れ萩菜碗

稲

賤屋まで秋はいれ紫やゝ来る限
和泉国百万町といふ山里が中ゝて
いなゝ中る里や泉別百万町樂

芋

いとゝ小く先りとうる今宵が
着ゝゝト高野山ゝ里ゝ北ゝる芋

露

さゝ露やまとゝ谷なる壺とこゝろ

高野山奥院

露乃世や乃世や乃世やなに乃奥の院

悼

我と我くまいるなかるゝ袖や露

一時軒の毋分乃ゝなる内

いとゝさふらのゝ乃ゝ露の袖

霧

風ゝのる川音強ゝ言瀧毋

相きゝふ海ゝゝる海辺ゝ那

伊ゝ乃ゝ浦一夜ゝゝゝ相音ゝ

高野大徳院

音ゝ言ゝ八ゝ棟住ゝゝ八ゝ谷

角力

勝相撲淀鳥羽さとを見そこなうや（やあイヽ）

お角抵よ石のうへ二尺の舞

雁

今うんといひ八百屋料理哉

世田村ゆくと

一時ゆく茶屋のつるみそこなう人名

鹿

なかひいる奥ゆゆゆゆかいろと帰

帰りまいる山や思ふも鹿ゆて名

紀列みて

うらせ三の筆捨松や——この者

月

月千金今宵一夜かけぬれし
いろ〳〵ものも雪の日一輪
なく人や古きを訪ふ月をりす
月ゆや住名は秋ぬ半ばぬ
始終去れりふ雲もれし
ぬりふなこゝろみ寺や入間やう
ぬりふ入侍ふ河漕うゝろみ月

月よいかに千賀ぬ泊竈カ浦し
ぬれは通江ぬまゝ蛙り紀三井寺
紀の玉河ゆて
大師の跡ぬりかゝまこのゝ人らまぬ
紀到蔵代の古坂ふ御訪方蛙ところ
一見古時伝象ぬ場面御訪ぬとこ
月のゆやもハく半時ぬ面ぬく

島ノクセ
芙蓉原ノ平ノ弓筆ヒとられて私たり
船もれ住名はいまさなゆハ多ら侍
古今序
宇治山の僧ぬ侍ぬ詞ぬ月ぬ蛙
なのなら侍いと秋の月をゆる雨ぬ雲
ゆのなるこゝとし

蓮

いろはにほへと七字形なる蓮也

登蓮 この義を尋ねるに蓮見の事

十八番 まきを風と云見る

菓

中定め 忘れ外る菓と増事なり

酒一本 なり 九日 法花の菓

此句八酒肴 みての肴なりとなし

紅葉

錦をは伊勢里と山乃麓紅葉

一つ〻の橋かる所もなし 鮒

わらはやまいなりうの所やあらめ橋イニ

菓もまつの西

楓 八出とこそ乳紅とかきなり

自服書 一〻く

一つ〻のいとく右乃みを字秋の紅葉をとる也

中〻〻作者

千載
[illegible]

稲日 秋夜

雄屋唄酒屋くゝみ秋法華
[illegible]る このなる唐菓ふ秋乃寂覺歟
價あくハイニ
[illegible]ハ價何[illegible]雄鶏みな秋の京
不乃秋久安寺とハ名[illegible]
七[illegible]ふ紀の山くかけ行きて
那智高野ふ[illegible]
老イニ
[illegible]乃浦[illegible]年の秋

[illegible]ハ和歌の津行[illegible]浦乃秋
常陸ふて
京[illegible]秋乃日高寺
西行 [illegible]積
秋ハ歟法師[illegible]みタアの京

湯雑

峯入 [illegible]も草鞋みな[illegible]

古文真宝
菊有秀兮菊有芳兮懐佳人
兮不能忘

かゝる者小なく八蓼くふ虫人見
まうしく六義この中女郎花
秀ある詞乃至八十まや蘭
十八番の中に詠ふ鄙山哉
水田を清う宝綱なれとも去る神に出ス
綱ノ誤歟
菓好像賛
少年少や侍まく菓子也侍
やうに見よ捧ゝ世む蓼まみ也
まりこ未む紅葉一小亀蓼椒

あるる家堂めて
一菓先ゝ穂よりいる穂よりいる芦簾
伊丹村小堂宗次とて七り十四
弱者灯明を也ハ弐ハ松明也
宗詩舞をなる所
天を酔中と見ゆ伊丹大燈籠
呉服社
八朔や二日ハ又ゝまそゝ

穴織社

絞るゝや試ハ[illegible]

大坂乃繁花ゝ

時雨とも[illegible]ハ藻ゝ禊ゝ

新酒のゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ明石米

松葉ゝ相生ゝ[illegible]ゝ

きくゝゝ[illegible]乃西南ゝ秋[illegible]

紀行 淡路田跡孫住宅あり

[illegible]

九月十三日堂ゝ市ゝ詣ゝ

住吉乃市大手筋へ[illegible]

みちく部

時雨

一順り四方めぐり也一くまなくイニ

やよ時雨降るかと戸足代をいそ

まくれば雨つゝもしかねの音雑ぶ

茅富士みて

客人やさゝりと出るこゝ一くれ

蕉門の道ゆき絶日時雨ふりひまあ

あま山霧ふ行いちはるふ嘉

やとまとはふ法勇いろ彩るふと時雨

幸手ぬ宿みて

見ハ海さりてのやと法雲うち

岩城とゝく

いとるとかゝる山くさまぶ

芭蕉句選拾遺上

ある茅舎の信不信らしい小祠でも祭って居る間ふ信しも家毎の神棚若しくは社寺

松ばかりと云ふのあり乃ち人間社寺

あるも俗とふ松ばかりと云ふ世俗の

宗因は示ふるものを見て自を知れ

法ならと例のそりきまとしれば頻りに

竹もハいなるとうとうとこの俳諧の

道の筆――と云句をおもひ出してとも云ふ

霜

字治みゝく

里人乃ちうるうりの名橋乃霜

茅舎の女性るとゝるゝ名ふ出あるく

蔦此葉のいとゝるゝこと霜此霜

蘭の葉の陰の翠ふたきあるを

訳出後日記に美人の図と前出あるこ

俳諧

不筆ふ月ふるせる橋やお名り

茅舎

雪

おもしろくぬきいゝ雪此雪

松ばかりと出ると積りし雪吉野

雪此松曾根も久しき谷所ふ

苗蕪や雪此野ふくきよのふ

仙台成安と書けるを朋安ふ書ふ時

仙台長海と書下出

雪此くるや此きあしらら此雪此

字治みて

十六夜

四しらてやまとハ人乃ちとゝ

義と云ふ世ハさ此ら

ゆきの神ら此おもひくろ

白仲帝
鶴寒上樹鴨寒下水

素秋と人はいふなれど雪
万向雪乃顕遠国乃名れかし
第子ゑ雪乃面けやとう雪深

鴨

鴨乃足ハ流まもつるまもれかし
かもとつのうゑ神垣のまつの葉

遷雛

宇治橋乃神や葉月乃ゆくゑ姫
ある第宇宙うて
庭ハ落葉黄外かゆき亦れし
紫葉葉ゑやつるもうて神ゑ風
志ら羽乃夜のもきりや雨れ乃解
さゑ風小ゑと桂嬢や伊勢神楽
よむと唐きし人九ほう神き玉電

[illegible]

節季は

[illegible]念佛[illegible]節

[illegible]

歲暮

一日ゟ大事[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

梅翁忌傳
當流先亡之発句

ちりし又梅見て桜孫もなし
夜乃錦うき世ハ宵の月見かな
見るにかくともろこし人の月秋かな

西鶴

玉篠や不引てくるゝ箱根

才麿

きゝ酒やまた見ぬ方に花ハおもはれ
紫ふね乃漕出て残せ夏木立
夜寒さを待うら紙ぬきぬたかな
日比なき法人の名残を年のくれ

佳風

今朝ハ津風かぬるゝもの旬鰹

曲菴

杖たけし腰へまかりし高山ばかり

きぬぶるの他人の帰き給う面
影一きせ中響ふ星乃物語
さ面紅ゆ尻も結ぶ糸御

喬室

同さ海や浴く見て上る波の花
辰乃うそ辰る沖べ乃ならく沢
人間の古きい船よ種なるそ
沖乃忘て元か面亀稲の月

花簾

京乃古い人ふれ乃せて花の山
ふり乃ふふ訓ふがすこの尽さう
稲妻や十津坂本法人家全
さうさうや ばくばく見紀鐘の声

蒼狐

狼乃ものいはよと乃山ふう
ひれ暑しー陸ふうせい海者

辻堂乃とり火ハ淋秋の昏

人形ふらしろ姿ゝ井戸の雪　　黙瑟

閑かゝる蚊とろ白し富乃うら

岩はし雪ふハ法ゝき祝き窓　　良雨

冬さむる富や乃ゝ長きゝゝ後向　　萬丁

医師さゝ見ぬ日ゝ乃冬さゝ　　眠牛

酒いきめ寺ゝ出ゝ出ゝ出ゝ　　五蓮

機鋪皆角力吉ゝ路ゝゝゝゝ馬

月ゝゝゝ夜や番船乃夢也

河ゝゝハ形き世なる色ゝ土ゝ礼

西山家

代〻攝天満ニ住シテ連歌家相續ナリ

- 宗因（昌琢門）
  - 宗春
    - 昌察
      - 昌林（現）
        - 昌森
        - 宗珍（同）

江戸誹諧傳系

- 梅翁
  - 西窪
    - 才麿
      - 佳風
        - 逸志

始メ一幽後ニ西翁又梅花翁又野梅翁世ニ知ル梅花ノ一章ヨリ此翁ヲ誹諧談林ノ祖トス天和二年壬戌三月廿八日没歳七十八葬大坂西寺町西福寺

井原松壽軒　攝住吉於社頭獨吟二万三千句興行夫ヨリ二万翁ト号　元禄六年癸酉八月十日没歳五十二

推本少文　別号舊德　始メ谷松笠軒初學ハ西武門ニテ則武ト呼又西丸ト改ム後梅翁ニ因ミ松壽軒ニ從ヒ故アツテ上ノ文字ニカユ　元文二年丁巳正月二日没歳八十二葬大坂西寺町万福寺

豊島有紀堂　始メ才尾　享保十二年丁未二月六日没　歳四十九　葬江戸谷中大雄寺

笠家　素竹軒　致曲庵　始メ半局菴其頃ハ江戸點者諸流一列ナリ此翁ヲ以連名ノ巻軸トス　延享四年丁卯五月廿七日没歳七十三葬江戸淺艸田原町報恩寺中高德寺

舊室　笠家活ゝ坊後　活井　始メ鰐糞　江戸點者
沉ヲ別ツヽ及ンテ宗因流中興ノ筆頭ナリ
明和元年甲申十月廿日没歳七十二葬江戸築地
覺證寺

尤簾　笠家古道
安永八年己亥十月
廿三日没歳六十六葬
江戸上野山下啓運寺

現尤簾　笠家幽雲齋
始メ槌義
辛丑春素外ニ屬ス

點琵　没其時ヲ同セサル
年月不詳

蒼狐　小菅柳前齋　始メ笠菴舊丈　菅神奉納獨唫
一日五千句興行　五千堂ト号　明和二年丙戌十月
六日没歳五十五葬　江戸　駒込德性寺

現良雨　没ス其時ヲ同セサル年月不詳

現沾涼　北東邑菴耿緑アリテ菊岡沾涼カ名ヲ繼
天明三年癸卯二月二日没歳八十五葬江戸ナリ
老後甲州故園ニ終ル　増上寺中昌泉院

萬丁　老後甲州故園ニ終ル

眠牛　増田甸畵菴　明和八年辛卯三月六日没歳五十三
葬武州糟壁驛成就院

現五璉寶馬　足高梅隣菴　安永八年己亥九月二日没歳七十六
葬江戸小石川一音寺
小菅後五千堂　始メ吉成萬歳洞先師ノ例ニ
倣テ奉納獨吟一日五千句興行ヨツテ今ノ号トス

現
素外　谷一陽井　別号玉池又三化

現
津富　島姸齋　別号君山
蒼狐没後素外三属ニテ
文臺ヲ開ク

現
花縣　山内
鯉橋隣

現
木丹　常
生白菴
天明七年丁未正月十六日
没歳
葬江戸下谷
廣徳寺塔中圓照院

此外梅翁之支流雖都鄙多唯當流之
擧一系而已

梅翁発句追加百十二章

春之部

庭訓小下の七草ぬすみ去
根生乃湯よむふやつの薬　松仁
あるゝ乳ゝ行る年毎乃すゝ掃
絵真
けふ乃門法雲ないうめさくら盛
六十九も一乃元日
十六歳名之字かへまゝ

ある人乃ものゝ中老ゝ
多もこのほも知らん梅のもゝ
風呂のくを きゝれゝ
噴泉井ふ雪ハ花の外 梅花
頭をふるめ柳を行基菩薩
いたゝ土をもゝ吾妻乃ふ公望
風便や京ちゝ人乃より 吹山
のゝ いゝ きゝ井ゝ打ゝ と云ゝ
智仁勇 法勇を題ゝ得ゝ

古今市ニ
去の行五今明年の山法
拙元人乃の四ハ雪と
のこなるも 元之市ゝ

なん去甘家ゝ人ゝ乃ゝ
物ゝ乃人ゝ侍ゝ伊勢橋
金風や東西ゝ江戸ゝ
明石ゝ
いゝ見ゝ人磨の眼ゝ梅朝
信農路乃約 赤号浦
富士ハ雪と里 裾みゝ京
日ゝ
四日市ハ つゝ 匠 田の橋

ゆふ野や云ふらひゆふゝん春の句
里人を相まちとさるや独活蕨
歌乃伝ばかりかねの井の蛙の面
独吟千句
嘶るや家ゝ軒なるゝ村雀
十ゝしの浪藤をとゝく
春かさゝ住る東乃日記の歌
内藤家に居るふかねくさうゝ
ゆゝしく侍はめてゝ歌ゝ時

お便宜やゆゝふまゝる春乃陰

夏ゝ部

伏見西岸寺あゝ

森道真もかゝみやりや更衣
ゆゝまゝつを花もうまゝ郭公
いつゝゝ耳をはふまゝふゝ親
云さゝきゝ人まあひゝ
其性や何事ゝ先ぼゝゝゝ

江戸高野幽山寂みて
若とせきこ一江戸勧めよ杜宇
松山路西追悼
ともせきこよ冥途乃道の祀郭
明石みくく
拵乃ゆ半きりこ乃羽る和歌聚下
京惣本寺珍林へ住こと
東武主守武源義總ゆ寺
黄檗山

一山乃祖
妙宿の谷よ毎説あきこと
吉沖元五井ゆ
江戸めて
云ゆ聚へ前る一ものと長者町
月菊堂但口の吉宇こく
おくとはふかくる時ゆ参草
前ゆ一ゆ月とこれ
ものゆく蟬乃毎教窟ゆ岡

ゆつりそよ筆捨松小蝉の吟

人の所ゆふ

かくもあらふかの愛さうを賞め定

江戸一日屋とらふ人のもとあて

一あれく百万味にのまとつ茄子

先茄子白法ちい牧有へくく

なるしいくをを繋みちこ陣

梓弓や谷中なるふ半月や紙幟

日未ふ我等まと紀田唄ふ

三吟

若井乃筒いつまを乃茶み宴

少年への挨拶

吉合鯨を世ハを井み一さう

ぶとやまとかく深世ハ車百合

黄薬山まく

親乃を乃ちつ捉ふみちつこちよいと

小西似春無行ふ

まん仁東次〻南や夏坐鋪、

かゝる京はしをよ[illegible]し夏[illegible]

江戸あゝ

[illegible]ふまはしけるはし

夏風[illegible]清[illegible]ちとハこのまてう

[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ羽織

[illegible]

屋別[illegible]のこゝろあて

舟八七里三[illegible]さ[illegible]ゆ夏の月

鎌倉一見[illegible]又東海道[illegible]

明[illegible]日三[illegible]小磯宿

箱根乃茶屋

燒豆腐[illegible]

[illegible]

右の酒[illegible]

江戸あて天狗氏所[illegible]

[illegible]望[illegible]

大井河

川[illegible]の宮

石山[illegible]

凉風や松なきこゝの小石川

江戸七面あて

凉風の赤ゝや八十七松なく

同本所新堀望あて

きゝ風や吹出す天下一貫文

同所あて高野大徳院與行

いと涼し紀大とも也ゝ浴のあと

ある人方小あ

時得ぬかゝ仰乃下きゝみ

宇治流與行

宇治新茶涼しき都ゝ風

六月十三日京入小

祇園會乃山路よりくゝ大津賀乃能

ある人乃與行

とも此茶よりさゝ者とも玉の汗

江戸今ゝ登ん時人へいひきを

合點あて秋風や森乃草

茶者嬰ゝ天陽流行

かゝる世ゝ流行ゝ

ゝゝきよ拾る山の皮ゝ

夏草や兵どもが夢の跡

秋くれ部

大伴世船乃人丸

風の一葉万里の外の梶

七夕

人間の五十年井出かへ星の宮

歩宮史おひ歩しきこゝ伝り宮

武蔵野ぶくを照天乃姫小萩

常陸帥や彼蓮生の文乃秋

八朔の一位祝義ゝ

天王寺あく

彼岸ゝ秋八月十五日西よりの

月白き島八幡かし墨田河

有明乃月きゝ松島物ゝ利

月八幡三八月

秋よゝ月ひさゝ世の月一輪

月ゝ月ゝ七ゝ東と各のり

芳野山四月讀の森月次会を
思ふらんやうもなし懐旧神
原ふ伝へん白河一書二所乃宮
まれ着乃中の間ふまもるも耐
三箱乃居湯
姥鶯もまりやさいく姥湯を
松山玖也新宅
やうめく新秋楽うへ松の孝

名ふ部
屋根や時雨谷源ふ耳生を
姫紅へも寒ふ木乃紫衣ふ
ふ柿ふこのも居法や深泉云
隠者の所ふ
名ふ紅や源遊傳乃翁ふ
横雲ふ
行宿乃跡ふ
武ふ毛蕪ふ

小家なきと膝とゆるがるの巨燈ハ
池田炭や名のる天下ハ炭らしら
○みち樵へ一ようみちしらや炭俵
勢州朝熊山金剛證寺ゆく
嵩なきやゆるる炭竈夕ひらき
同所下山乃打ちる雪ハけきハ
坂ゆくる落ハ小ぶ也きいこの
同国久居茶屋家ゆて
其沿来ゆるけ乃ぶ領ハ雪

男山乃禁ゆ入道一ちゆくを訪く
雪をおうとハ落ちる昔男山
五西やうきをハ伊勢乃津を一宿ゆく
伊勢乃津ハ玉あらき
ゆくゆかゆ入伊勢の津ハ玉あ御
月ゆくを乃かけや大ちる大神樂
酒屋みく
奥深きの情ちうを生ちう
民乃家ハ又あらを燈ちひ

奥刕岩城八幡宮法楽

さく花を寄る人や榛もらひ

あさ影にうつる年や雪礫

三十三年忌手向

かなふまいは親指癖しとみ鶯

新宅

吉も千世萬さくし竈手首

天明元年辛丑首夏

維摩堂ニ

付けかなさうなニ杜若

方由母追悼

ま坐の蓮のちりしひ相ホ

なくなりも香を花とちよまり

袖ニまし宮の桜も流人に

〇多くの目利ハ山のあかさホ

〇きりくや顔をきぬ

詠月も肖せりて照急

〇月ハ一輪もなくハ谷の落

道心者の方ハ

〇阿蘭陀の文字ハ横ニ天つて

行吉と迴りけり

拾遺

四時混台

〇萩のうへ混花江蜊ハ伊勢乃鯉

茶の湯みて半生

〇多くを毛香ハ花こい雪白茶ちり

〇富士乃裾ハ山ハほとまれ川白由

〇吉酒ハあまを麻地蔵て金よふ

〇おうかくなかけよ郭公

〇時里や伊丹みてし撫乃国新の下紅葉

○ 詠めぐ浦の名所や秋めぐら
帰みし
○ 早く夕日と色代秋の待宵
○ 百船らせむ行きて小家の子守
○ 西直のからつや白き五月
○ み山に年まで行ぞら平小
出川みし
○ 行駒川のこの水や古紙子
○ 明石潟色なき水戸の月見
○ 主護を地との櫻小ちくな
○ いい接とみるや墨筆か之月
○ 之西陵とおくの手跡の露なし
○ 能中花代や延喜の鏡餅
一宿 小田原や掛けられ出し奥山
○ 夏霞見え道あり京の里
勝田和して而夫小とめられて
○ 夏川々流れ水小とめてふ

○ 吹れ七一川手紙の中小雪比
○ ちりて海乃見れや夜あふむ月乃来
胡態
○ 胡蝶や草も海水ましく里
二見 二句
○ 吹らいいつまで浅ぎ秋も海ろ二見鴻
○ 同の玉を清き浦乃月見哉
経冊 所出小
○ 何とこの島先よ六合のとかなしさ
○ 家とも淡路の里人中かとぎ候
川柳高や一秋酒

○ さゝまハ十んも大津のおゝ屋と蒼様
○ 家をく前ならえなとしもと
一座の中人か漕ぬされ小
○ よりし火そを可乃字小飛てろ
高島霞乃の道云
○ 一天小あら地小ハ意字の思ひ字
井は地の火一吹山卒
○ 行年の池秘蔵を打しや子規
○ 木の芽梅田昇るやまきの宿

○ 日置しをの月下比の乃乃の影かな
○ 春風や吹きる味の小春こ
○ ナいくし乃ちりこ来ちる菜のせ
太宰府
○ 七十一露や一条まさるまで
庚申待
伊勢して いせ参小庭て
○ しまい小やいせあこの一露七な
○ 時小母仏の法名いきそこ旅

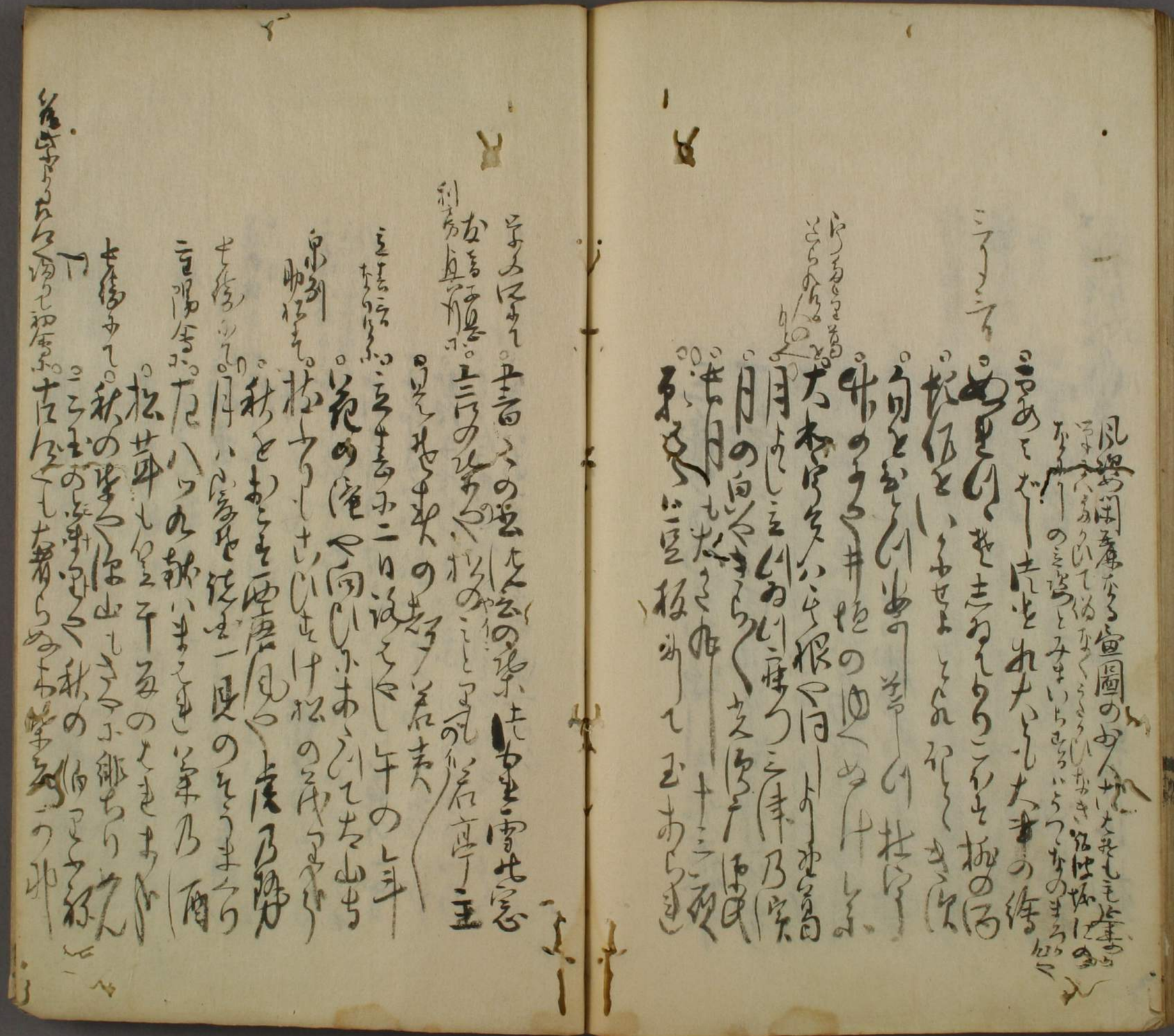
初雪に信とかふるや
舟の人　ゐろう

○かくれけよ宮ハ八幡みやこ路
仏兜て
○火燵して仏兜とる一雪の宿
○五月雨や天下一枚うら屋
○連歌爲に寺卿娘哉
茶のをみて歌に 発句なと名付し
こころにさすの花さきて
○埃と満る家乃薄きの蛙一番
○行燈の灰より一乃見まもの外

海雁候遊 秋哉なとて　とらうところと
落るかいちりきる画に
○鳥よりも先清こや いさめ 宗祇に
○浮橋や落てさんめる秋の月
西江の海見る船を見て
○雨にうるも まるの秋乃あらし
杉中見てをるにおいて
○一雪をみて袖に拂ふ詩人
なに見て年去とて一折りかるの敷に
○いつのまて十日一日のことはあまれ
なにこと
ゆきて

紫野下ゝ陣子二郎左衛門
明石ゝて。伊ちゝら兵庫へやらふ天津丁
場
三月乃三日しやさうじて沙弥
門司崩。書初めもの むつかしや 筆硯
八幡殿 男むすび乃石清水
なのまゝ殿 たつゝ殿の御願
平ちゝ殿
文日ゝ
明暦く 梅のはらふ 雪ゝ白
梁をつかふつゝ 祇園の 雲ゝせす
夕ゝ 風ゝ 沖ふかく 浪ゝ 出ゝ

三鬼の 京ゝ 涼ゝ き 茶碗
一 切ゝ 信田 狐ゝ 知ゝ まゝ
さゝ 月ゝ ゝ 原 ゝ ゝ 汁 雜
八 伊 ゝ 月
ゝ ゝ ゝ 赤 八 武 ゝ の 小 石
鄭 ゝ 酒 宮 ゝ ゝ ゝ 山 ゝ ゝ
藤 余 所 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ



棹
郭公宮きたなきハ無ニ中

初逢歌
初懐紙の面白しや神の春
去年の扇折を晴れる懐紙かな

脇起して
覚えも梅の塔せは絵後かな

千句を記して
拍子とた山中寺とくりあらあ

道興僧印点
たききる羽之八よらからかな

六いり
勝ツテハ百句の子孫懐紙一つかな

千由口記して
宗祇の見え京悪き
乃さくら
何れ誠に力なき宗匠かな

君が為の白きやめむ花の雪
桜さくら親ハ去年の生ながら
花子産むも佳刻の家さくら
千合歳を今日を見せつきハ懐

住吉にて
筆ハ松竹と去年の海にも何もなし